最優秀賞「平野の鳥」

岩 朝 清 美

昭和30年代、四国の山村から
岡山の農家に子守奉公にきた
少女の物語

戦後の天満屋周辺の風景

〔岡山市〕

岡山市の代表的商店街は表八ヵ町といわれ、北から南へ、上之町、中之町、下之町、栄町、紙屋町、西大寺町、新西大寺町、千日前に亘る、およそ1,000メートルの長さを誇る。これらはすべて岡山空襲で焼失したが、戦後復興し、昭和30年代には道幅も拡幅され、賑わいを取り戻した。下之町の天満屋百貨店にはバスターミナルがあり、買い物客が集中するため、他の商店街はその対策として昭和35年頃から鉄筋のビルを建設することになった。

『岡山市今昔写真集』樹林舎より

初めての休みの日。アイ子は波子と渚と連れ立って天満屋へ買い物に行った。そこは見るもの全てがアイ子には信じられない場所であった。アイ子がこれから一生かかっても決して消費し尽くせないであろう、膨大な数の、あらゆる種類の品物がこれでもか、これでもかと陳列してあった。三人の田舎娘はグルグルと手当たり次第に品物を見て回った。気の遠くなるような品数、それらはカラフルで光沢があり、良い匂いがし、贅沢だった。天満屋の全てが三人には夢の世界そのもののように思えた。

現在の天満屋百貨店

２０２３年８月撮影

優秀賞「セピア色のインク」

木 下 訓 成

戦時中の淡い初恋を描く

半 田 山 植 物 園 〔岡山市〕

明治38年（1905）に築造された岡山市水道局の半田山配水池は、全国的に見ても非常に例の少ない円形の配水池です。しかも全国で８番目に整備された近代水道で、技術的にも歴史的にも高い価値を持っています。旭川から取水し三野浄水場できれいにした水を半田山の配水池にポンプアップして、重力を利用して岡山市内に配水する施設です。しかし、半田山配水池より半田山植物園としてのほうが有名かと思います。昭和39年（1964）、当時岡山市長であった岡崎平夫の意向により、配水池一帯を植物園として整備し、オープンしました。人々の生命にも関わる大事な水を扱っている配水池を一般公開している例は、全国的にも非常に珍しいです。

岡山大学大学院環境生命科学研究科 准教授樋口 輝久
「岡山の土木遺産 ―地域資産としての保存と活用―」
（『岡山の自然と文化』40号）より

年老いた主人公が半田山植物園を訪れ、昔を思い出すシーン

植物園内の、そこだけが幾何学模様に切り取られたような、上から見ると毛利家の家紋のように見える円形の貯水池跡の脇をとおりすぎて、長い石段を昇りはじめた。去年もそうだったが、見上げると気の遠くなりそうなほど長い石段だった。昇りながら、途中でもう決して頭を上げてあとどのくらい石段が続いているか確かめることはすまいと心に決めた。この石段は永遠に続くのだと思い込んでいれば、頂上に着いたとき思いがけない奇跡のように思えるからだ。

やがて豁然と眺望の開けた展望台に出た。

素晴らしい眺めだ。

岡山の街が一望のもとに見渡せる。真正面には大きく銀色にうねる旭川、左手に百間川、右手に操山、さらにその向こうには恐竜の背のように聳える金甲山・・・。

写真提供　岡山観光連盟

優秀賞「伯備線の女ー断腸亭異聞」

三ツ木　茂

文豪永井荷風と谷崎潤一郎の
岡山での交流を描く

谷崎潤一郎疎開の地　〔真庭市勝山〕

岡山県北部に位置する真庭市勝山。かつての勝山藩の城下町で、出雲街道の宿場町として栄えた「勝山町並み保存地区」は白壁や連子格子の家々、高瀬舟の発着場跡があり、往時の風情を残しています。

そんな勝山に疎開した「文豪・谷崎潤一郎」。終戦間近な昭和20年7月、谷崎潤一郎は家族とともに勝山市街地にある民家の離れに疎開しました。勝山への滞在中に、豊かな自然と人情に触れ、名作「細雪」を執筆しています。

町並み保存地区の中心に位置する勝山郷土資料館では、谷崎潤一郎の勝山での生活を感じさせる資料を展示。また、資料館前には石碑「文豪・谷崎潤一郎疎開の地」が立てられています。

参考：『きび野』「わが町・村の自慢」１４１号（２０１６年春号）

谷崎が赤岩旅館にやって来て荷風を散歩に誘った。谷崎の住む小野はる方は旅館からほんの十数メートル先。二階建ての離れを借り切って、夫人や親族と暮らしている。以前は料理屋だったと聞く。

勝山の町並み
写真提供　岡山観光連盟

永井荷風滞在の地　〔岡山市北区〕

荷風はその夜、岡山県庁に近い岡山市弓之町の旅館の二階で寝ていた。岡山に来て二週間余り。旅館は「松月」といった。仮の宿のつもりだったが、女将がきさくで気に入っていた。

案内看板「永井荷風滞在の地」（２０１８年当時）

永井荷風が疎開した旅館「松月」跡地付近
（２０１８年当時）

２０１８年１月撮影